
ホントの優しさ

萩原愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホントの優しさ

【Nコード】

N0524A

【作者名】

萩原愛

【あらすじ】

まだ幼かった蘭は好きだった、小鳥の「ピーちゃん」をなくしてしまった。どうしても『死』というモノが理解できない蘭に新一は……。そして蘭は……。

「ひつく・・・ひつく・・・」

「おい、蘭・・・もう泣くなよ？」

泣きじゃくるわたしに困ったように声を掛ける新一。

「だってえ・・・」

でも泣きやむことが出来ない私・・・。

今から数時間前、大好きだった小鳥の『ピーちゃん』が死んじやった。

ずっとずっと・・・可愛がってた・・・大好きなピーちゃん。

どうして死んじやったのか分からなくて。

あのときの私には『死』というモノが理解できなくて・・・。

どうして死んじやったら戻ってこないの？

どうしてピーちゃんは、いつもみたいに元気に鳴いてくれないの？

「・・・どうして・・・死んじやったら戻ってこないの？あんなに幸せそうな顔してるんだよ？

死んじやったなんて嘘だよな・・・？

ねえ、新一・・・ピーちゃんはただ眠ってるだけだよな？

私の元に戻ってきてくれるよね？またピーって元気良く鳴いてくれるよね？」

新一にこう問いかけても返事は帰ってこない。

「ね・・・新一・・・ピーちゃん、戻ってきてくれるよね？」

目に溢れるほどの涙を溜めて、わたしは新一に訴えた。
もしかすると、このときわたしには分かっていたのかも知れない。
死んでしまったモノは戻ってこないということを。

でもどうしても信じられなくて・・・新一がいつもみたいに「ああ」
って言うてくれたら

ピーちゃんに戻ってきてくれるような気がして・・・だから新一に
同意を求めてたんだ。

わたしはずっと新一を見つめてた。

でも新一は私と目も合わせず、何も口にしない。

部屋は本当に静かで、「静寂」という言葉がピッタリだった。

・・・聞こえるとすれば規則正しく鳴り響く、時計の針の音くらい。
「カチ、カチ」とゆっくりゆっくり、わたしの耳に届き、とどろく。
・・・。

いつもより針の音が遅いように聞こえるのは、わたしの気のせいなのかな・・・？

しばらくしてその静寂をかき消すように新一はこう言った。

私に訴えかけるように・・・ゆっくりと・・・一言一言を大切にこ
う言っただ。

「・・・死んでしまったモノは戻ってこない・・・」

「・・・」

「でもそれが何であろうと、人の心の中で生き続けるから・・・消

えてしまうことは絶対無いから」

「・・・・・・」

「ピーちゃんは蘭の中で歌い続けるから・・・歌うのをやめてしま
うことは決してないから」

「・・・・しんいち・・・・」

「だから・・・な？泣くなよ・・・？オメーが泣いてたらピーちゃ
んだって絶対悲しいぜ？」

そう言った新一の顔、今でも忘れない。

無理に作った笑顔。

いつもの笑顔とは全然違う、今にも崩れてしまいそうな悲しい笑顔。
本当に今にも泣いてしまいそうで、涙が溢れてきそうで・・・・でも
新一は泣かなかったんだ。

自分が泣いちゃったらピーちゃんが悲しむから・・・・・・かな。

新一は最初からちゃんと分かってたんだ。

『死』とは生きていく上で必ず直面する事実だということ。

そしてそれをちゃんと受け入れなきゃならないということ。

悲しいのは自分だけじゃないってことを。死んじやったモノ自身も
きっと悲しいんだよね。

自分のせいで泣いている人を見ることが辛いんだよね。

私だったら絶えられなくて悲しくて、泣いちゃうかも知れない。

そんな思いをさせちゃってごめんね、ピーちゃん・・・本当に
ゴメンね

そして新一、ありがとう・・・。

あなたの御陰でホントの優しさがなんなのか、分かった気がするよ。

本当に本当に・・・ありがとう

「ふわああ・・・あれ？わたし、寝ちゃったの？」

机の上には広げたままになつてゐる読みかけの本。

そしてわたしの肩には淡雪色の肩掛け。

わたしはその肩掛けを見て、少し微笑んだ。

（コナン君が掛けてくれたのかな・・・）

わたしはそう思いながら、もう一度目を閉じてみる。

すると悲しいけどどこか温かい、セピア色の思い出がわたしの中で鮮やかに色付き始めた。

あのとき感じた、人の・・・あなたのホントの優しさ。

大切なモノがいなくなつて、冷たくなつてた私の心を温めてくれたあなたの言葉。

だから私も。優しさを忘れずに。
あなたが言ってくれたことを胸に。
いつまでも待ち続けるから。

涙を流してしまうこともあるかもしれないけど。
できるだけ泣かないように頑張るから。
あなたを心配させないように頑張るから。
だから絶対生きて帰ってきてね。

それまでずっと。

そう、ずっとずっと……。

待ってるからね

（後書き）

あとがき

皆様こんにちは^^お久しぶりです、萩原愛です！

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！><

私が頑張っていけるのも、全て皆様のおかげです・・・！！

本当にありがとうございますv

そして今回は初めて（チビ）新蘭小説を書かせて頂きました。

新一君と蘭ちゃんの一見ほのぼのな様で、でも切なさを隠している関係が、

素敵だと思って・・・書かせて頂いたのですが・・・何と云っているのやらという感じですね^^；

未熟者で話の所に矛盾しているところが多くありますが、これからも頑張っていけますので、

どうぞよろしくお願い致します><；

連載させて頂いております、「a smiling face

a smile」はもうすぐ投稿させて頂きたいと思います

><；亀ペース申し訳ありません；

それではこの辺で^^本当にありがとうございます！！

失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0524a/>

ホントの優しさ

2011年1月7日17時48分発行